

すてきな  
すてきなのにわがわがたさへ

はじめましての挨拶

今日はじめて関わりを持ったあなたは、今日までにどんな経験をしてきたのだろう。

この手紙を読んだ誰かの人生に良き風が吹くことを祈って。

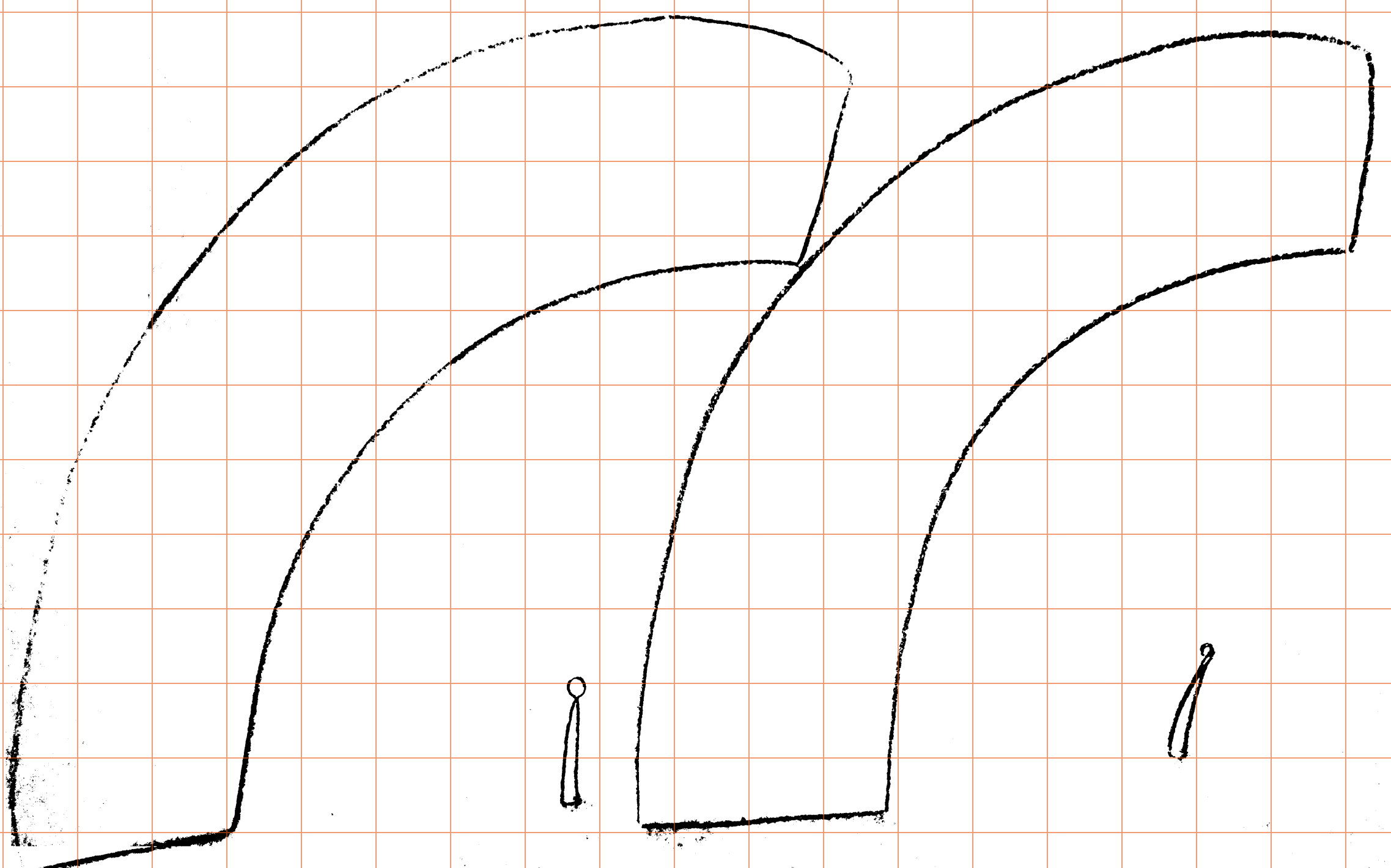
青くて丸い大きな星で、星の数ほどの人間がそれぞれにいくつもの幸せや不幸を感じている。

おおまかに同じ形をしていて、その実全く違う中身の私たちは一つの世界で別々の景色を見ている。駅のホームで、公園で、目が合った話したこともないあなたが見ている景色は想像することはできても、実際にみることはできない。

汚れた作業着でベンチに座っている四、五十代の男性は仕事帰りだろうか。手にはシュークリーム屋の袋、帰りを待てるお子さんでもいるのだろうか？少し離れたところに立っている30代くらいの女性は赤子を抱えている。赤子は鼻をピーピーと小さくならして穏やかな表情で眠っていて、何か楽しい夢でも見ていそうだった。

そういう風に勝手に思いを馳せてみるとなんだか暖かい気持ちになる。電車の中で居合わせた見知らぬ人間に思いを馳せても愛しいと感じられる。人間に感じる温かな愛しさ、それはそれぞれが違う形で日々を過ごしているけど同じ場所で生きているからなのだと考える。人間の成り立ちはさまざまで、さまざまな環境、さまざまな言葉、さまざまな人間たちの輪の中で人間の形が形成されていく。

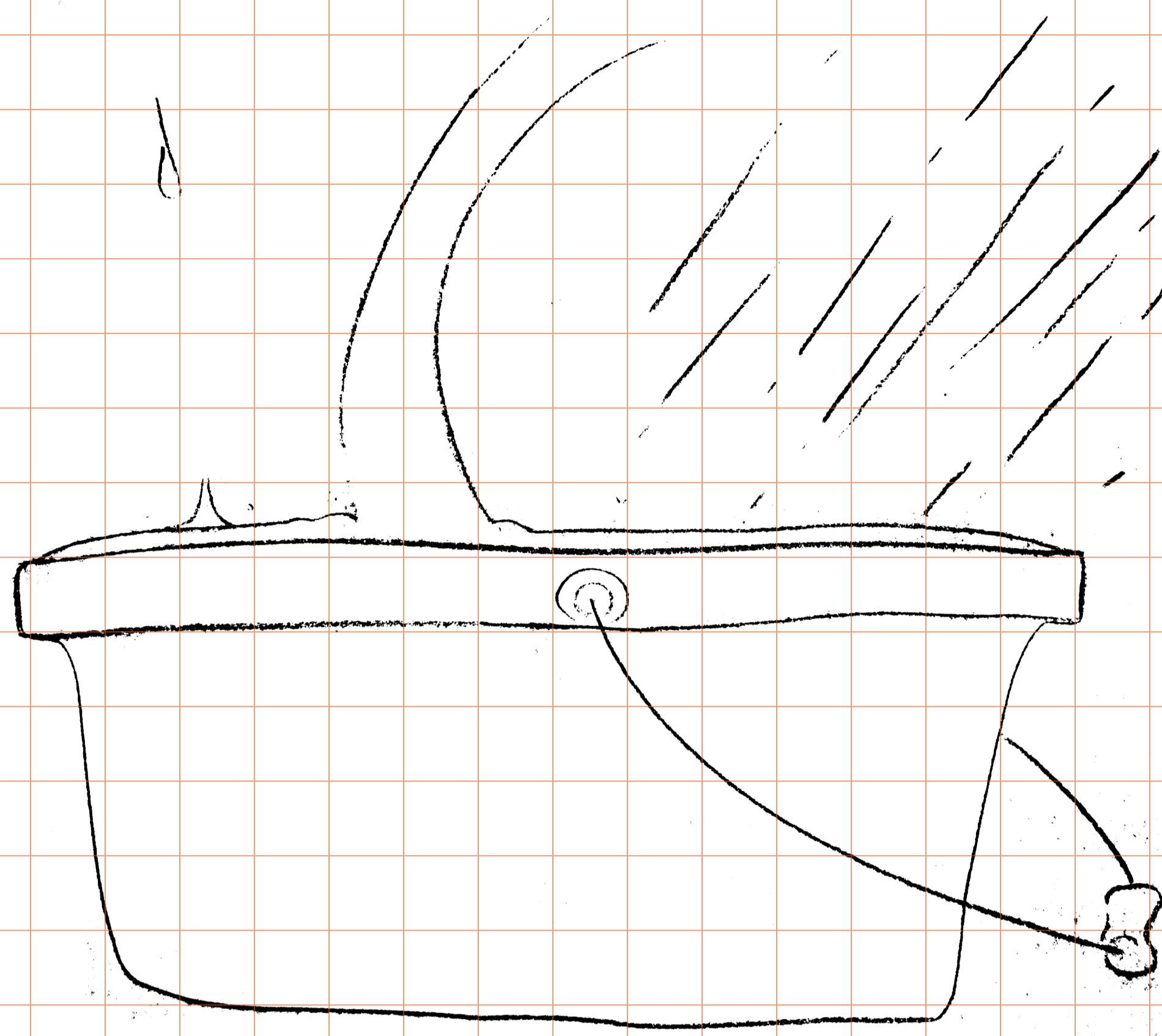
「わたし」や「あなた」が今日ここにこのような形で存在するまでの過程。それを0から100まで全て余すことなく言葉にすることはできないだろうけど、それぞれの「思考」や「思い出」からずっと、断片的に滲み出ている。





## 2. 思い出

人間が見聞きした全ては長い時間をかけて少し変質する。きっと、元の情報とは別物になったものたちが集まって今この瞬間やこの先の道標になるんだと思う。



脳みその中に大きな建物がある。その建物の名前は思い出酒造。私はお酒が大好きだから、今からそういう例え話をする。お酒にあんまり興味がないあなたも工場見学に来たつもりで読み飛ばさないでくれると嬉しい。

思い出酒造は、経験したことを材料にして思い出の酒を作る場所。その酒の原料は主に3つで、「人」「場所」「時間」だ。多分、これら三つを合わせたものを体験と呼んでいる。次の文に一例をのせる事にする。

”昨日は友人とお茶をする約束だった。私たちは午前中の終わりに集合し、近くのベンチに座りどこでお茶をするかしばし話し込んだ。友人はsnsで話題の喫茶店に、わたしは行きつけのカフェに行きたかった。結局は私が根負けして、昼下がりにやっと喫茶店に入店した。そこで友人はコーヒーを私はカフェラテを飲んだ。カフェラテはびっくりするほど美味しかったので友人にも一口飲ませた。友人は「やっぱりこの喫茶店にして正解だったでしょ」と笑い、わたしは「それもそうだね」と同じように笑った。”

こういった日常の体験の記録がまるやかに、またはっきりと目の奥に映像として映し出せたらそれは体験と呼ぶべきだ。この例において「人」は友人と私。「場所」はベンチ、カフェ、喫茶店。「時間」は昼前から昼過ぎだ。体験の記録は脳みその中にある思い出酒造で長い時間をかけて発酵する。発酵する過程で、情報の取捨選択が起こって、原料である「体験の記録」は「思い出の酒」へと変容する。発酵は「楽しい」「悔しい」「悲しい」など、自分に影響を与える感情が付随する情報だけを残して体験の記録の純度を上げる工程だ。そして、自分に毛程も影響を与えないどうでもいい記録をを忘れる段階でもある。

同じ経験をしていても、人によってどのように取捨選択をするかは異なるから面白い。先ほどの一例をとっても、美味しいカフェラテを飲んだことか、友人とは今後も良い付き合いができそうだったことか、行き先を決めるのに時間がかかったことか、どれにフォーカスを当てるかの選択肢は無限大だ。いずれにしても、強く印象に残った出来事や言葉のみ残ってそれ以外の記録ははぼんやりと思い出酒造の彼方に消えていく。例えばさきほど体験の記憶が”友人といつも通りお茶をしていて、なんだかこの人とは長く付き合っていく気がすると思えた。その日飲んだカフェラテは格別に美味しかった気がする”と大事なところだけ残り、事実から変わってしまったようなそうではないような状態になる。

こうなればいつのまにか思い出の酒は完成していて、たまに浸ったり、酔いしれたり、大切に脳みそ酒蔵で守っていたりする。そして、大切にしまいすぎていつか存在自体を忘れていたりすることもある。



### 3. はかじ

スープのあじに評価をつけるならスープのものさし、感動の大きさをはかるなら感情のものさしがいる。ものさしは人から貰ったり思い出を材料に作ったり、道で拾ったりもできるらしい。

目の前で起こった出来事をどういう感情で受け止めるのか、問われた疑問にどう答えるかを考える時、脳みその中では「合理・非合理」「楽しい・つまらない」など、たくさんの「価値観のものさし」が使われている。そのものさしは重さを測るものなのか大きさを測る物差しなのか、それとも目には見えない物で気持ちを図っているのか。はたまた全部を測っているかもしれない。

はかるものの種類はにんげんの数だけあって組み合わせも毎回変わる。一つの事象が起こった時、そこに居合わせた人数分、その事象について思うことは違うということだ。

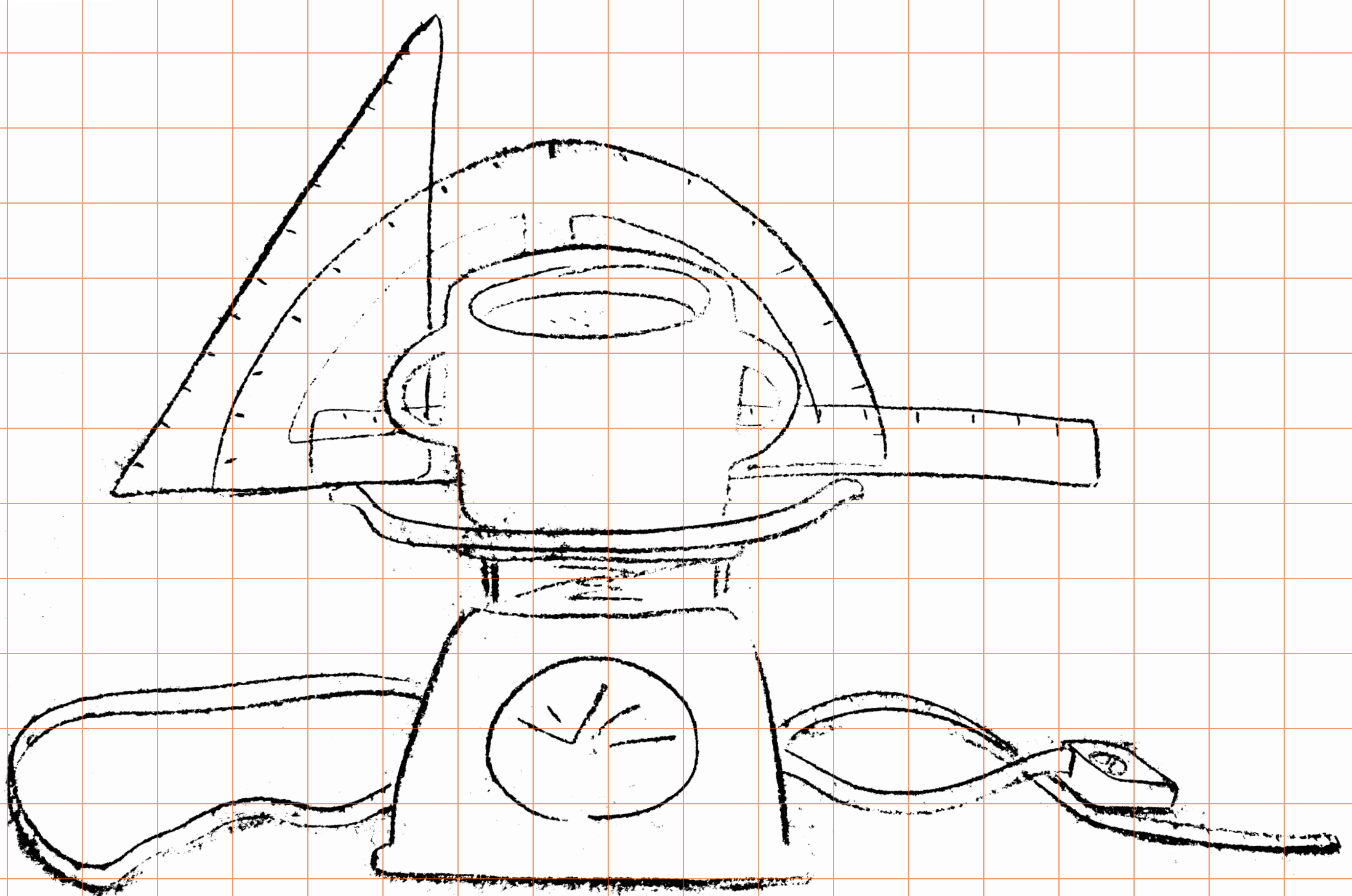
さて、肝心の「ものさし」とは一体なんなのか。それは「思い出の酒」から出来ていると仮定したい。思い出の酒は、人間が気づかない沢山のところで思考に影響を与えている。そして人間個々の中に膨大な量、種類が保存してあって、それら全てをひっぱり出して日々あらゆるところでものさしとして役に立っている。「わたし」や「あなた」が今どのような感情を持つか、思考を持つか、を左右している。

このように、おそらく人間の頭の中は大変複雑になっている。そういうことなので、言葉を間違えたり、勘違いすることもあり、ぶつかってしまうことも当たり前にあるはずだ。多分人間はそういう生き物だ。

人と関わることはきつとこういうことだ。実際とは違っているかもしれないけど、自分の中にある目の前の人の像を信じて関わり続けていく様なのだ。

きつと、生きていく在り様を、人間は「生き様」と呼んでいるのだ。

「あなた」が歩いてきた道はきらりと光っている。



#### 幕間 記号

ソシユールは「個々の存在に意味はない。それらは周囲との対比によって初めて成り立つ。」と述べている。人間は、人間に囲まれて生きることで初めて名前という識別番号が必要となるみたいだ。



## 4. いまは、はた、アト。

愛しくてすてきなにんげんもいつかは死んでしまう。  
そのにんげんの思い出やものさしはこの世界のどこかに残っ  
ていて、後から気がつくこともしばしばある。

この瞬間も、いつの時だって、人間は五感で受け取った情報  
からさまざまな事を想像する。あなたの友人、家族、大切な人  
がどんな人間なのかを言葉にしようとするのはとても難しい  
ことなのではないだろうか。「私」は「私」。「あなた」は「あな  
た」なのだ。

例えば私が「あなた」を「優しい人」と形容したとして、そ  
れは私目線の言葉で別の人「あなた」を形容したら全く違う  
言葉になるのかもしれない。その人間がどういった人間であっ  
たか表す言葉はその人間を見てきた人の数だけあるはずで、ひ  
とつの言葉で個人を表現することは不可能なのだと思う。誰が  
どのような人であるかを表す言葉はその時、人、タイミングに  
よっても変化するのも知れない。「あなた」と楽しい時間を過  
ごした後なら私はポジティブに「あなた」を形容するだろうし、  
もし喧嘩をしてしまった後ならネガティブに形容するのも知  
れない。

今日の前で起きていることを端から端まで全て正しくつたえ  
ることのできる言葉なんてなく、それと同じように故人がどう  
いった人間であったか表す言葉はその人の死後も定まることは  
ないのだと思っていたい。

人間は、長くて100年ちょっとという短い時間の中で必死に  
生きている。日々新しい事を知って考え方が変わり続けていく  
様が、今日の少しの生きている感であったり、昨日のなんだか  
嬉しい感になっている。たぶん、毎日のちょっとしたエネルギー  
はそういうふうにできていて、明日を頑張る力になっている。

私も生きているから共感したり、尊敬の気持ちがあって、そ  
れを愛しいと呼んでいる気がする。悲しい例えをするけど、誰  
かがもう目覚めなくなってしまったとしてその人について「優  
しい人だった」と述べる人もいれば「無口で恐ろしかった」と  
述べる人もいるだろう。本人が「いやいやそれは違うよ！」と  
思おうにももう伝える術はないし、仮に故人の知り合い同士で  
故人談義に花を咲かせてもお話の答えは宙に浮いたままなのだ。

死人に口はないけれど、生きている人には口があるので個人  
を形容する言葉は永遠に変化し続けて今日も何処かで呼吸をし  
ているのだ。





## 5. リンカーの挨拶

明日からも、様々な人たちがそれぞれの目的に向かって日々を過ごしている中で共通のモノやコトを通して分かり合ったり距離を取ったりする。

それはハッピーなことだったりそうではなかったりするんだろうけど、人生はそうやって紆余曲折しながら作っていく物なんだと最近思う。

たくさんのことを考えながら生きていく人間という生き物は、たまらなく愛しい存在なのだと最近感じている。

さまざまな世界の見方をしている何人かのにんげんたちが、私からの手紙、という同じ文章を読んでいることは不思議でちょっと素敵なことだと思う。「人間はみんな、それぞれの思い出を持っていて多様な尺度で世の中を見るものさしをもっているが、何かを通じて同じ意味を理解して共有できることは素敵で愛しい事実だな」私が言いたかったことはこのようなことだ。この何かとは、昨日一緒に食べた昼食だったり、好きなコンテンツだったりこの世の全てのものやことのこと。

日々、精一杯生きている人間たちはこんなことを考えている時間なんてなくていっぱいいっぱいになってしまう時もあるのだと思う。でも、たまには通じ合うこと、気持ちを伝えて気持ちが帰ってくる嬉しさや素晴らしさに思いを馳せてみるのもいいかもしれない。

この文を読んでもくれたあなたにとって、この世界が良いものでありますよう。

堀 ひとし

### 参考にした本

- ・荒井裕樹 / まとまらない言葉を生きる / 柏書房 / 2021年5月13日
- ・池上嘉彦 / 記号論への招待 / 岩波新書 / 1984年3月21日
- ・外山滋比古 / 思考の整理学 / 筑摩書房 / 1986年4月24日
- ・松村圭一郎他二名 (編) / 文化人類学の思考法 / 世界思想社 / 2019年4月16日
- ・三木那由他 / 会話を哲学する - コミュニケーションとマニピュレーション - 光文社新書 / 2022年8月18日
- ・寄藤文平 / 絵と言葉の研究「わかりやすい」デザインを考える / 美術出版社 / 2012年12月7日